生命の脈打つ動き
—Melvilleの“The Apple-Tree Table”について—

岡 村 仁 一

—Meantime, within me, the contest between panic and philosophy remained not wholly decided. (388)

1．無意識の領域

Melvilleの短篇，“The Apple-Tree Table”は，物語の語り手が初めて足を踏み入れた自宅の古い屋根裏部屋で林檎材のテーブルを発見する場面から始まる．「この家に最初に住み始めてから五年間，一度も屋根裏部屋に足を踏み入れなかった（for five years after first taking up my residence in the house, I never entered the garret)」(378) 理由について，語り手は「特別な誘因が無かったからだ（There was no special inducement.)」(378) と述べている．

> 我が家に保険をかけている会社も屋根裏部屋を全く調べようとはしなかったのだから，所有者が神経過敏になる必要があろうか？　階下には十分な広さがあるのだから尚更だ．しかも屋根裏部屋に通じる階段のドアの鍵は紛失していた．
> The company that insured the house, waived all visitation of the garret; why, then, should the owner be over-anxious about it?—particularly, as he had no use for it, the house having ample room below. Then the key of the stair-door leading to it was lost. (378-9)

語り手にとって日常生活に何不自由がない以上，敢えて未知の領域に足を踏み入れる必要はないということになる．

ところがこの状況は，語り手が庭の片隅で屋根裏部屋に通じる鍵を発見することにより一変する．

> さて，何かの鍵を手に入れたとなると，人は直ちに鍵を開けて中を調べてみたくなるという誘惑に駆られるものだ．今回の私の場合も，結果として生じる如何なる利益とも関係なく，ただ単に好奇心を満足させたいという本能からということになろうか．
> Now, the possession of a key to anything, at once provokes a desire to unlock and explore; and this, too, from a mere instinct of gratification, irrespective of any particular benefit to accrue. (379)

この鍵は語り手を未知の領域に誘い入れる鍵ということになる．そしてついに語り手は未踏の屋根裏部屋に入っていくことになるのだが，Bickleyは「語り手がドアを開けるとき，象徴的に自らの無意識の領域に入っていく（symbolically enters his own unconscious when he opens the door)」(72) と述べている．この無意識の領域とは，語り手の意識下の世界であり，まさに無意識のうちにもう一人の自分（another self）との出会いが求められていると考えられる．

ところでこの屋根裏部屋は「漏斗型をした古い屋根裏部屋（the old hopper-shaped garret)」(378) と描写されている．この「漏斗型」という形に注目すると，Melvilleの他の作品でも，例えば“The Piazza”の語り手が未知の領域に入っていくときも「漏斗型(hopper-like)」の存在が眼前に登場している．

> 歩廊から北西の山脈の中に，外から見る限りでは*漏斗型*の窪み，乃至は陥没した一角のかなり上の部分に，一種の紫色の胸ポケットの中に神秘的にしまい込まれた，ある正体不明の物体を私は認めていた．
> From the piazza, some uncertain object I had caught, mysteriously snugged away, to all appearance, in a sort of purpled breast-pocket, high up in a *hopper-like* hollow, or sunken angle, among the northwestern mountains [. . .] . (4, italics mine)

更にDillinghamは“I and My Chimney”との関連性に触れ，以下のように言う．

> 語り手の屋根裏部屋は「漏斗型」で過去の遺物に満ちてはいるが，語り手は心中，この屋根裏部屋を「私と私の煙突」の語り手が彼の漏斗型の煙突と結びつけたように，エジプトの大ピラミッドと結び付けてはいない．
> His garret is “hopper-shaped,” and it contains relics of the past, but he does not link it in his mind with the Great Pyramid of Egypt as does the narrator of “I and My Chimney” his hopper-shaped chimney. (350)

「漏斗型」がピラミッドに結びつくとすると，ピラミッドのイメージが登場するMelvilleの諸作品，例えば*Moby-Dick*, *Pierre*, “Bartleby”…と更に広がりを見せることになるのだが，Dillinghamが指摘する通り，こと“The Apple-Tree Table”に関してはピラミッドと結びつくには至らない．“I and My Chimney”との関連で未知の領域としてより相応しいのは，むしろ煙突内部にあるとされる「秘密の納戸（the secret closet)」(374) の方であり，これが“The Apple-Tree Table”の屋根裏部屋に相当している様に思える．

それではこの屋根裏部屋で語り手はどのような未知の世界・未知の自分と出会ったのであろうか？　実は林檎材のテーブルからの虫の誕生という，その後の物語の展開が，後々対比されるべく，既にここで先取りされて語り手自身によって実体験されているのである．そうだとすると，“The Apple-Tree Table”は林檎材からの虫の誕生の物語であると同時に語り手自身の再生の物語であるといえるのではあるまいか．

先ず語り手は「ゴシック様式の説教壇に登る様な粗末で幅の狭い，古い踏み段（a rude, narrow, decrepit step-ladder, something like a Gothic pulpit-stairway)」を登り，「説教壇の

様な踏み台（a pulpit-like platform）」に至り，更にそこから「ヤコブの梯子といった感じのより幅の狭い梯子（a still narrower ladder—a sort of Jacob's ladder）」を登って「高い明かり窓（the lofty scuttle）」（379）に達するという行程を執る．この明かり窓は「牡牛の眼（a bull's eye）」に喩えられ，これは後に「ブラットル・ストリート教会に撃ち込まれた砲弾の跡（the spots where the cannon balls struck Brattle street church）」に喩えられる「二匹の虫が作った二つの穴を正確に指し示している二つの詰め蝋の箇所（the two sealing-wax drops designating the exact place of the two holes made by the two bugs）」（397）に相当する．そして語り手は「踏み段を登りつめてひと息つこうと踏み台の上で足を止め（climbing the stairs to the platform, and pausing there, to recover my breath）」（379）たとき，光に群がる虫たちの「シンバルの様なブンブンいう羽音（a cymbal-like buzzing）」（380）を耳にするが，これはまさに後ほど大騒動を巻き起こす，林檎材のテーブルから聞こえてくる "Tick! tick! tick!" という，虫がテーブルを囓る音に相当する．

また語り手は上記行程の全体の様子を「実際，踏み段全体も踏み台も梯子も蜘蛛の巣の花綱が飾られ，蜘蛛の巣の絨毯が敷かれ，蜘蛛の巣の天蓋が架けられていた（Indeed, the whole stairs, and platform, and ladder, were festooned, and carpeted, and canopied with cobwebs）」と捉え，「こういった蜘蛛の巣の中には，空中墓地の様にあらゆる種類の昆虫のミイラとなった死骸が揺れ動いていた（In these cobwebs, swung, as in aerial catacombs, myriads of all tribes of mummied insects.）」（379）と描写している．そのような行程を経て，最終的に明かり窓から表に顔を出したとき，語り手は以下のように言う．

> すると，ああ！　何という違いだろうか．墓穴の暗がりと仲間の蛆虫どもに別れを告げ，ついに肉体を離れた人間が生命に溢れた緑と不滅の栄光の中に恍惚として立ち上がる様に，私も蜘蛛の巣だらけの古い屋根裏部屋から香しい空気の中に頭を出し，下の小さな庭から伸びている高い木々の梢に歓喜と共に迎えられているではないか．木々の葉はスレート瓦の天辺より高く聳えていた．
>
> And ah! what a change. As from the gloom of the grave and the companionship of worms, man shall at last rapturously rise into the living greenness and glory immortal, so, from my cobwebbed old garret, I thrust forth my head into the balmy air and found myself hailed by the verdant tops of great trees, growing in the little garden below—trees, whose leaves soared high above my topmost slate.（380）

語り手は屋根裏部屋の虫を死の象徴，それに対して表の緑の木々を生の象徴として捉え，死からの復活を疑似体験している様に描写されている．ここには肉体的な死から逃れたいという渇望が見て取れる．

ところが林檎材のテーブルから出てきた虫は，これとは対極的に捉えられている．その誕生を初めて目にした語り手は，先ずその様子を「蝶がその蛹殻から抜け出すように（like a butterfly escaping its chrysalis）」（389）と形容し，更に次のように言う．

> その動きは*生命の脈打つ動き*である．私は魅了されて立ち尽くしていた．本当に精霊は存在するのだろうか，だとするとこれがそれに当たるのでは，と私は思った．

いや，私は夢を見ているのに違いない．私は視線を炉の赤い火に走らせ，それからテーブルの青白い光に戻した．私が目にしたのは目の錯覚などではなく，驚嘆すべき事実であった．

Its motion was *the motion of life*. I stood becharmed. Are there, indeed, spirits, thought I; and is this one? No; I must be dreaming. I turned my glance off to the red fire on the hearth, then back to the pale lustre on the table. What I saw was no optical illusion, but a real marvel. (389, italics mine)

ここに見られるごとく，死の象徴としての虫は，語り手の意識の中で "life" そのものに変貌している．更にその虫の様子は「光り輝き悶えながら産みの苦しみを続けていたが，次の瞬間，自らの牢獄からまさに抜け出るところであった (Sparkling and wriggling, it still continued its throes. In another moment it was just on the point of escaping its prison.)」(389) と描かれている．この虫の姿に語り手はもう一人の自分を見ているのであり，ここには肉体的な死からの復活ではなく，古い認識からの再生へと導かれる自らの別の姿，即ちもう一人の語り手が示されていると考えられる．

2．自らを映し出す鏡

Melvilleの諸作品中における "The Apple-Tree Table" の位置づけに関し，Dillinghamは「"The Apple-Tree Table" は短篇作家としてのメルヴィルの経歴の最後を飾る作品であるが，彼の諸短篇の結びであると同時に，後の作品，*The Confidence-Man* や*Billy Budd*への導入ともなっている ("The Apple-Tree Table" ends Melville's career as a writer of short stories, but it is as much an introduction to his later fiction, *The Confidence-Man* and *Billy Budd*, as it is a conclusion to his shorter works.)」(366) と述べている．Sealts (231) も指摘している様に執筆時期から見ると，確かに "The Apple-Tree Table" は雑誌に発表された短篇の最後を飾るものであると同時に，*The Confidence-Man*の執筆と軌を一にしていた作品であるが，執筆上の特徴としても，例えば*The Confidence-Man*における "Casper Hauser" (7) に対し "The Apple-Tree Table" には "Fox girls" (382) といった時事ネタが採り上げられている点，この二作品には共通性が見受けられる．

Dillinghamは*The Confidence-Man*の冒頭で登場する「クリーム色の服を着た男 (a man in cream-colors)」(3) を巡る一連の解釈を扱った第二章のタイトル，「人の心は十人十色 (Showing that many men have many minds)」(7) に注目し，

何人にも変装する詐欺師（クリーム色の服を着た男はそのうちの一人に過ぎない）は「独創的な人物」なのであり，それ自体説明不可能であり，彼に応じる人々の本質を照らし出すライムライトのみが説明を可能としている．その見方にまさにその人物が表されているのだ．

The Confidence-Man in his several disguises (of which the man in cream colors is but one) is an "original character," inexplicable in himself but a Drummond light in illuminating the natures of those people who respond to him. They are as they see

him. (345)

と言い，更に

> 独創的な事件は神秘的な出来事で，様々なタイプの人物の注意を惹きつけ，その人物は事件の神秘を解き明かそうとして自らの本質をさらけ出すこととなる．
> An original incident is a mysterious occurrence that catches the attention of various kinds of people, who reveal themselves while trying to solve the mystery. (345)

と述べている．つまり，独創的な人物・事件との遭遇は，その人物・事件を如何に見，如何に解釈するかにより，むしろ解釈している人間自身を映し出す鏡としての役割を果たしていると考えられると言うのである．

Melvilleの作品中，自分自身を映し出す鏡の働きをしているものとして先ず思い起こされるのは，*Moby-Dick*第99章に登場する「スペイン金貨（The Doubloon)」である．Ahab船長に始まりStarbuck，Stubb，Flaskの高級船員たち，銛打ちのQueequegやFedallah，果ては平水夫ではあるが経験豊かなマン島の老人（the Manxman）に至るまで，マストに打ち付けられた金貨の図柄を見ては次々と己の解釈を披露していく様をStubbは「ほら，また別の解釈だ．テキストは一つだというのに．一種類の世界にあらゆる種類の人間というわけか．(There's another rendering now; but still one text. All sort of men in one kind of world, you see.)」(434）と評しているが，更にそれを端的に示しているのが正気を失った黒人少年Pipの言葉，"I look, you look, he looks; we look, ye look, they look."（434）である．まさにこれは*The Confidence-Man*第二章のタイトル，「人の心は十人十色」に通じ，このような観点から"The Apple-Tree Table"における，林檎材のテーブルを巡る，「独創的な」事件を解釈する人物たちをDillinghamは，妻とProfessor Johnsonに代表される「理性(reason)」型，娘たちとメイドのBiddyに代表される「直観（intuition)」型，それに語り手に代表される「感覚論（sensationalism)」型の三タイプに類別している（348).

ところで人は行動を起こす際，目的となる対象を如何に見ているかが人を動かす誘因となっている．つまり対象の見方が異なってくれば，それに伴い，起こす行動も異なってくるのである．例えば「娘たちにとって虫とは忌まわしさと同意語であった（To them, bug had been a word synonymous with hideousness.)」(395）筈のものが，「光り輝くオパールのような(like a fiery opal)」(395) 虫が林檎材のテーブルから出て来るのを目撃した後，「たとえこの美しい生き物が精霊でないとしても，それでもそれは霊的な教訓を教えてくれる(if this beauteous creature be not a spirit, it yet teaches a spiritual lesson)」(397）と言っている様に，娘たちは態度を一変させ，その虫が死んだ後も防腐処理を施し，本物のオパールの様に大切に保管し続けることとなる．更に語り手の妻については，

> 垢抜けない，貧相なテーブルを，豪華で洗練された家具の仲間入りさせるなどもってのほかだと考えていた妻であったが，幸いにも家具屋でニスを塗られ，金貨と見紛うばかりにピカピカになってテーブルが戻ってくると，誰にも増して歓迎したのが他ならぬ妻であった．

> She disrelished the idea of so unfashionable and indigent-looking a stranger as the table intruding into the polished society of more prosperous furniture. But when, after seeking its fortune at the cabinet-maker's, the table came home, varnished over, bright as a guinea, no one exceeded my wife in a gracious reception of it. (381)

と説明されている様に，これまた態度が一変している．また語り手自身も屋根裏部屋からテーブルを下ろす理由を「私はこの可哀想な小さな隠者のごときテーブルが，かくも長きに渡って暖かい人付き合いから追放されてきたからには，暖かい紅茶沸かし，暖かい炉辺，暖かい心といったありとあらゆる歓待で包んでやろうと固く心に決めた（I resolved to surround this sad little hermit of a table, so long banished from genial neighborhood, with all the kindly influences of warm urns, warm fires, and warm hearts)」(380-81) と言っておきながら，その実，テーブルの実用性に注目し，家族のための「いかした小ぶりの朝食・お茶用テーブル（a nice little breakfast and tea-table)」や自分用の「トランプ台（a whist table)」，それに「素晴らしい読書机（a famous reading-table)」(381) として利用しようと内心考えている．後に語り手自身，テーブルから聞こえてくる音の解釈を巡って，「奇妙な具合に，しかも満ち足りていないとも言えない心境で，私はデモクリトスとコットン・マザーの間を揺れ動いていた（In a strange and not unpleasing way, I gently oscillated between Democritus and Cotton Mather.)」(394) と告白しているが，認識の変化によって，行動もまた変化してくるのである．

3．語り手の認識の変化

十二月のある土曜の晩，Cotton Matherに「魅了された (under a sort of fascination)」(382) 語り手は，「どういうわけか，理に適っていると思われていた自分の見解も以前ほど理に適ったものとは思われなくなってしまう（Somehow, too, certain reasonable opinions of mine seemed not so reasonable as before.)」(382) という経験をする．日頃，自らが全幅の信頼を寄せている「理性」に対し，疑念が頭をもたげてきたまさにその瞬間，語り手は初めて林檎材のテーブルからの不思議な物音を耳にするのである．しかし翌朝，語り手は次のように反省する．

> 私はというと，ベッドに入ったまま窓ガラスの日光を眺めつつ，真夜中にコットン・マザーなど読み耽るのは良くないことだ．神経に病的な影響を与え，幻覚を起こさせる元となる，などと考えていた．
> For my own part, as I lay in bed watching the sun in the panes, I began to think that much midnight reading of Cotton Mather was not good for man; that it had a morbid influence upon the nerves, and gave rise to hallucinations. (384-85)

そう考えてはみたものの，ベッドから起き出してみれば，テーブルから聞こえてくる説明不可能な音が最早家族全員にとっても衆知の事実となっており，ここで「精霊は存在するのか？　しかもティー・テーブルなどに取り憑くものなのか？（Were there spirits? And

would spirits haunt a tea-table?」(387) と再び本気で考え始めた語り手も,「しかし昼時になると,こうした気分も薄れはじめた.通りで現実に活動している人々と絶え間なく接しているうちに,このような妄想は私から払い除けられてしまったのだ (But, towards noon, this sort of feeling began to wear off. The continual rubbing against so many practical people in the street, brushed such chimeras away from me.)」(387) と再三認識を改めている.*Moby-Dick*第96章「給油炉 (Try-Works)」でPequod号の舵を執っていて危うく転覆の危機を脱した語り手Ishmaelは次のように言っている.

> ああ,人間よ! 余り長く火を見つめてはならない.舵に手を置いて夢見てはならない.羅針盤に背を向けてはならない.振動する舵柄のわずかな手応えを感じたらすぐに受け入れよ.あらゆるものを毒々しい赤みを帯びて輝かせる人工の火を信じてはならない.夜が明け,自然の陽光に照らされ,空は輝き渡るだろう.叉をなす炎によって恐ろしげにギラギラ輝いていたものも,暁と共に全く別の,少なくともずっと優しげな陰影を与えられていることだろう.燦然たる黄金の輝かしい太陽こそ唯一の真実の光明であり,他は全て嘘つきにすぎないのだ.
> Look not too long in the face of the fire, O man! Never dream with thy hand on the helm! Turn not thy back to the compass; accept the first hint of the hitching tiller; believe not the artificial fire, when its redness makes all things look ghastly. To-morrow, in the natural sun, the skies will be bright; those who glared like devils in the forking flames, the morn will show in far other, at least gentler, relief; the glorious, golden, glad sun, the only true lamp—all others but liars! (424)

"The Apple-Tree Table" の語り手もここに見られるIshmael同様,"the natural sun" こそ真実の光なのであり,"the artificial fire" に欺かれないよう心せよ,と自らを戒めている様に見える.そして更に,音の正体を精霊の仕業だと決めつける娘たちを散歩に連れ出した語り手は,「デモクリトスの精神がいまや益々強くなっていた.不思議な符合なのだが,太陽の光が強まるにつれ,デモクリトスの精神も強まったのである.(The spirit of Democritus was stronger on me now. By a curious coincidence, it strengthened with the strength of the sunlight.)」(392) と述べるに至る.Dillinghamの分類に従うと,ここで言われている "the natural sun" は,作品中のDemocritusや語り手の妻,Professor Johnsonの "reason" を象徴し,"the artificial fire" はCotton Matherや語り手の娘たち,お手伝いのBiddyの "intuition" を象徴し,"the hitching tiller" の振動を身を以て感じることにより判断の根拠としようとするIshmaelは,光り輝く虫の誕生に立ち会い,そこに「生命の脈打つ動き」を感じ取った語り手が代表している "sensationalism" 派に属するということになる."reason" 派と "intuition" 派はお互い,最後まで自分の意見を変えようとせず,その一方,その両派の間で一見立場を失い,揺れ動いているように見えるのだが,実は一歩引いて冷静に状況を観察しているのが "sensationalism" 派の語り手という図式になっているように思える.

4．鏡に映ったもの

"The Apple-Tree Table" は，恐怖とサスペンスに満ちた謎解きの筋立てを装いつつも，その実，ユーモアと滑稽さに満ちた作品である．例えば，夜中に林檎材のテーブルからの不思議な音を聞いて狼狽する語り手は酒に酔ったと妻からたしなめられ，この様子が作品中にコミカルに描かれているし，「女デモクリトス（a female Democritus)」(394) と語り手より畏敬の念をもって形容されているその妻でさえ，虫の誕生を不寝番する際，地下室のサイダーが弾ける音に飛び上がって驚く様がやはりコミカルに描かれている．このユーモアの裏には一歩引いて客観的に全体を見つめる目が存在し，そこに映るのが頑なに己の主義，主張を守り通そうとする者たちの滑稽な姿なのだと言える．Melvilleの他の短篇，"I and My Chimney" や "Jimmy Rose" にも登場する，お手伝いのBiddy（アイルランド系移民に多いとされるBridgetの愛称）の迷信深さが笑いものにされている様子は，自らの迷信深さに気づかず，黒人奴隷Jimの迷信深さを笑いものにするHuckleberry Finnにも通じ，確かにRosenberryが言う様に「マーク・トウェイン的（Twainish)」(183) という形容が相応しい．しかしこれは，*Moby-Dick*第64章 "Stubb's Supper" で，自らのどん欲さや無知に気づかず，鮫のどん欲さを批判し，黒人コック，Fleeceの無知ぶりを愚弄するStubbに通じ，更に林檎材から漏れ出る音を耳にする前の，恐れを知らぬ語り手がCotton Matherを笑いものにしていたのにも通じている．「学識ある教授(learned professor)」(397) で「博物学者（naturalist)」(396) のProfessor Johnsonも，単純な計算を間違えるあたり，魔法使いの "Madame Pazzi" (396) と同列に並べられ，その信憑性の不確かさもさりげなく示されている．物事を冷静に見る目を表す*Moby-Dick*のPipの言葉，"I look, you look, he looks; we look, ye look, they look." はここにも生きているのである．

Works Cited

Bickley, Robert Bruce. The *Method of Melville's Short Fiction*. Durham, N.C.: Duke Univ. Press, 1975.

Dillingham, William B. *Melville's Short Fiction: 1853-1856*. Athens: Univ. of Georgia Press, 1977.

Fisher, Marvin. Going Under: *Melville's Short Fiction and the American 1850s*. Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1977.

Melville, Herman. "The Apple-Tree Table." In *The Piazza Tales and Other Prose Pieces, 1839-1860*. Vol. 9 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1986, 378-97.

---. *Moby-Dick or The Whale*. Vol. 6 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston & Chicago: Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1988.

---. *The Confidence-Man: His Masquerade*. Vol. 10 of the Northwestern-Newberry edition of *The Writings of Herman Melville*. Ed. Harrison Hayford et al. Evanston & Chicago:

Northwestern Univ. Press & Newberry Library, 1984.
Rosenberry, Edward Hoffman. *Melville and the Comic Spirit*. Cambridge: Harvard Univ. Press, 1955.
Sealts, Merton M., Jr. *Pursuing Melville 1940-1980*. Madison: Univ. of Wisconsin Press, 1982.